

# 令和6年度 学校評価報告書

加賀市立錦城中学校 校長 山下 悟 印

1. 学校教育目標	「お互いの個性を尊重し、心身ともに力強く成長することで、持続可能な社会の創り手として自ら課題解決に取り組み、創造的に未来を生きていくことができる生徒を育成する」
2. 目指す生徒像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 将来の夢や希望を持ち、自主的にその実現のために努力できる生徒（挑戦）</li> <li>・ 自ら考え、学び、自他の良さに気付く生徒（創造）</li> <li>・ お互いに認め合い、助け合う生徒（協働）</li> <li>・ 自らの考え・主張を自分の言葉で伝えられる生徒（発信）</li> </ul>
3. 目指す教師像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学び手は常に正しいという視点を持った教師</li> <li>・ 誰もから信頼される教師</li> <li>・ ドグマにとらわれず、学びを進める教師</li> <li>・ 夢を語り、夢を持たせる、夢先案内人たる教師</li> </ul>
4. 学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒の学習活動、日頃の成果を発揮する場と機会を意図的に創り出し、自己達成感、成就感を味わわせる</li> <li>○ 学校教育活動等のあらゆる場面において自主的、主体的、能動的で創造性にあふれた活動を引き出す</li> <li>○ PBS（ポジティブな行動支援）を根拠とした生徒指導、授業改善と支援体制を通して生徒、保護者、教職員共々のQOLの向上に努める</li> </ul>
5. 今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 将来の夢や希望を持ち、自主的にその実現のために努力できる生徒（挑戦）・・・「強く」</li> <li>☆ 自ら考え、学び、自他の良さに気付く生徒（創造）・・・「正しく」</li> <li>☆ お互いに認め合い、助け合う生徒（協働）・・・「正しく」</li> <li>☆ 自らの考え・主張を自分の言葉で伝えられる生徒（発信）・・・「美しく」</li> </ul>

評価項目	①教育課程 学習指導	
今年度の重点目標	自律的に学ぶ生徒の育成～メタ認知の強化を通して～	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ さまざまな教育活動を通して、自ら学ぶことに積極的で、自分自身で学ぶ目標を設定したり、計画的に進めていけるよう生徒をサポートしていく。</li> <li>・ 個別最適な学び、協働的な学びを効果的に取り入れていく。</li> <li>・ ICT機器等を効果的に活用し、互いの考えを共有し合い深める場を充実させる。</li> <li>・ 市教委伴奏チームや外部とも連携し授業力向上につなげる。</li> <li>・ 全国学力・学習状況調査および石川県基礎学力調査の結果、授業アンケートなどの結果を教科部会等で検討し、基礎学力の定着、活用力の向上のための手だてを行っていく。</li> <li>・ 組織的な授業改善のために、校内研修会の充実や授業力向上のための協力体制の整備に取り組む。</li> </ul>	
主担当	主幹教諭・研究主任	
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 昨年度は「生徒に委ねる時間」を意識したことで、主体的に学習する姿が増えた。これまで、学習に積極的でなかった生徒も少しずつ自分に出来ることから取り組み始めている。</li> <li>・ 一方で一部の生徒は何をすればいいか分からず戸惑っていたり、周りと比較して自分の学習を深化できていない。</li> <li>・ 自由進度学習を行う際、教師間のサポートや理解に差があるため、教科部会や研修を通して足並みを揃えていく必要がある。</li> <li>・ 生徒一人一人が自分自身の学びを客観的に見られるような仕組みを取り入れていく必要がある。</li> </ul>	
評価の観点	(成果指標) ・ 課題に取り組んでいる間、自分のやり方が上手くいっているか、自分で分析している。 ・ 課題が解決できない時は、やり方を変えたり、他の方法を試してみようとしている。	(努力指標) ・ 生徒が意欲的に学べる工夫（授業、授業外問わず）をしている。 ・ 生徒が学習において目標をもったり、計画的に行えるようサポートしている。
実現状況の達成度判断基準	「課題に取り組んでいる間、自分のやり方が上手くいっているか、自分で分析している。」「課題が解決できない時は、やり方を変えたり、他の方法を試してみようとしている。」と答えた生徒の割合が、 A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	「生徒が意欲的に学べる工夫（授業、授業外問わず）をしている。」、「生徒が学習において目標をもったり、計画的に行えるようサポートしている」と答えた教師の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	C、Dの場合は授業方法や形態などの再検討を行う。	
備考	生徒調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	やり方が上手くいっているか分析している…74% (B) やり方を変えたり、他の方法を試す…82% (A)	90% (A)
判定結果(最終)	やり方が上手くいっているか分析している…82% (A) やり方を変えたり、他の方法を試す…71% (B)	95% (A)
成果と課題今後の改善策等	全体として、生徒たちが自立的に学んだり、メタ認知スキルの向上に関しては成果が見られる。「自分のやり方を分析している」という項目では、約80%の生徒が「よくしている」または「している」と回答しており、多くの生徒が自らの進捗を振り返り、課題解決に向けて積極的に取り組んでいる様子が伺える。また、「課題が解決できない時の柔軟性」についても、全体の約70%が取り組んでいることから、生徒たちがさまざまな方法を試しながら解決に向けて努力していることが確認できる。 一方で、「よくしている」と回答した割合が30%前後にとどまることから、さらに一歩進んで主体的に課題に挑む生徒を増やす余地があることも見えてきた。この点は、今後の成長への可能性と捉えられる。また、自己分析ややり方を変えてみることの習慣がまだ十分身に付いていない生徒も一定数いることから、こうした生徒たちがより自信を持てるような支援を強化していくことで、全体のスキルがさらに向上することが期待される。 これらを踏まえ、これからは生徒たちの「できた」という実感をさらに増やすために、計画的な課題の取り組み方や振り返りの方法を全体で共有することが有効だと考える。また、小さな成功体験を積み重ねることで、生徒一人ひとりが「自分でできる」という自信を深め、さらなる柔軟性を発揮できるような環境づくりを進めていきたい。 教師においては、学期に1回は単元内自由進度学習を行うために、教科部会で繰り返し協議を重ね、成果や課題を共有し、少しずつ新しい授業を進めることができるようになってきた。その中で生徒1人1人のつまづきや課題解決に向け、きめ細やかなサポートを目指していく。次年度は教科間の連携を深め、より充実した指導につなげていけるようにしていく。	

評価項目	②生徒指導	
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「生活行動目標（時を守り、場を清め、礼を正す）」、「PBS（ポジティブな行動支援）」による生徒が安心・安全に過ごせる居場所づくり（集団づくり）に努める。</li> <li>・自己指導能力の育成に向けた積極的な生徒指導を行っていく。</li> </ul>	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会と連携し、生徒たちが自己決定する場面を増やし、自分たちで決めたルールを自分たちで守るという自治的な意識をさらに高揚させていく。</li> <li>・積極的な生徒指導を心掛け、自己指導能力の育成に努める。ルール遵守やトラブル、いじめにつながる軽率な言動を、生徒たち自身の声かけによってなくしていきけるような働きかけを継続していく。</li> <li>・学校行事や清掃活動等において、縦割り活動を充実させることで3年生が中心となった自治的集団を育て、その中で生徒一人ひとりの集団意識の向上にも努める。</li> <li>・全校集会は生徒が自分たちの思いを語る場と位置づけ、生徒会を中心に進行し、たくさんの語り合いがなされるようにする。</li> <li>・学力向上のための学びのサポートチームと連携し、構成的エンカウンターを取り入れていく。その中で、顔を上げて人の話を聞く心をもって聞きくなど互いに安心して話し合い、語り合いができるような関係を築く。</li> <li>・月に一度の生活アンケートや、Qアンケート等を積極的に活用しながら生徒一人ひとりに寄り添うような教育相談の充実を図る。</li> </ul>	
主担当	生徒指導主事	
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな場面で、縦割り活動を含めリーダーを中心とした自治的活動が充実してきている。昨年度の学校生活アンケートでは、「学校に行くのは（どちらかといえば）楽しい」、「まわりの人に（どちらかといえば）親切にしたり優しくしたりしている」の2項目では高い数値を出していることから生徒も学校生活に過ごしやすさや楽しさを実感していると思われる。今後も生徒たちの実感の表れとして最も肯定的な数値がさらに伸びるように、また、否定的な生徒がゼロになるように安心安全な学校であること+αの楽しい活動や自信を持たせる取り組みがさらに充実するような働きかけを全職員で考えていく。また、一部の生徒の言動で困ったり悩んだりする生徒も存在することから、生活アンケートやQアンケートを通して生徒の悩みや不安に気づき早急に対応することや、生徒一人一人の自己指導能力の育成に向けた積極的な働きかけが必要と感じている。いじめや問題行動等のトラブルについては、積極的に認知し、情報共有と素早い対応を今後も継続していく。</li> <li>・学校行事や全校集会などにおいては生徒が主体的に活動する場面が増え、生徒の成長が見られた。その一方で、返事を含めて自分の考えや思いを積極的に表現することが苦手な生徒もおり、リーダーだけに限らず誰もが自分の考えを表現することが苦手な生徒にとっても発言・発信しやすい雰囲気や場面づくりをさらに進めていく必要がある。</li> </ul>	
評価の観点	(成果指標) <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が安心・安全を実感でき、温かい学級・学校となっているか。</li> <li>・集団の中で、互いの違いを認め合い、思いやりのある言動がとれている。</li> <li>・生徒一人一人が自身の言動について考え、その場にあった適切な判断がとれている。</li> </ul>	
実現状況の達成度判断基準	「学校に行くのは楽しい」及び「まわりの人に親切にしたり優しくしたりしている」と答えた生徒が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	学校に行くのは楽しい…95% (A)	親切にしたり優しくしたりしている…96% (A)
判定結果(最終)	学校に行くのは楽しい…96% (A)	親切にしたり優しくしたりしている…98% (A)
成果と課題 今後の改善策等	「学校に行くのは楽しい」及び「まわりの人に親切にしたり優しくしたりしている」の2項目で中間結果よりもさらに高い数値が出た。PBS（ポジティブな行動支援）を根拠とした生徒指導を年間を通じて行うことで、QOLが向上した生徒の割合がさらに増え、肯定的な回答につながっていると捉えている。また、月1回の生活アンケートや週1回の生徒指導部会の実施により、生徒の困り感に対して把握、対応が早期に行えていることも肯定的な回答につながっていると考えている。 来年度もこの方向性を維持し、教職員の異動があっても全教職員の共通理解のもとで組織的に今年度と同様に対応していきたい。	

評価項目	③キャリア教育・進路指導	
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・系統的にキャリア教育をすすめ、主体的に進路選択をする能力・態度を育成する。</li> <li>・学習したことを今後の活動に活かそうとする態度を育成する。</li> </ul>	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学活や道徳・総合的な学習の時間を通して自分を振り返り、将来の生き方を考えたり、社会的自立に向けて必要な力を身に付ける授業を意識して行う。その際、キャリアパスポートを活用する。</li> <li>・1年は職業調べやキャリア、適性検査、2年はジョブカフェや職場体験、3年は高校体験入学や高校説明会、面接練習などの取り組みを行う。</li> <li>・学校生活の様々な場面で、主体的に自己決定する場面をつくっていく。</li> <li>・STEAM教育やプログラミング学習などを通して、論理的思考力や問題解決力を身につけ、自身の活動に生かす。</li> <li>・各教科でキャリア教育に関連する内容の洗い出し、キャリア教育の年間指導計画を充実させる。</li> </ul>	
主担当	進路指導主事	
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・系統的な進路学習を行っていることで、大半の生徒が自分の将来の生き方を考えており、一応の成果が出ていると思われるが、進路のことといえば、「働くこと」「高校のこと」というイメージがあり、「自分の生き方を考えること」そのものが進路学習であると考えるにくい状況がある。また、活動を通して自己の変容を実感するまでに至っていない。</li> <li>・行事や委員会活動などの自主的な活動や自己決定の場を多くつくることで進路を考えることにもつながっていると考えられる。</li> </ul>	
評価の観点	(成果指標) 生徒は総合的な学習や道徳や学活の時間などを通して、自分の将来の生き方や進路について考えることができていく。	
実現状況の達成度判断基準	「自分の将来の生き方について考えることができた」と答えた生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	87% (A)	
判定結果(最終)	85% (A)	
成果と課題 今後の改善策等	3年生はライブプランニング授業、2年生はトークフォークダンスを行い、実際の職業人に触れたり、自分の将来について具体的に考える活動を行うことができた。したがって、判定結果も85%と高い数値となっていると考えられる。1年生は今後、金融教室が実施される予定である。こちらも自身の将来につなげられるように指導を行っていく。次年度に向けての課題は、結果としてはうまくいったが、計画性が甘い部分があったことである。担当者で話し合い、来年度の計画を立てる必要がある。	

評価項目	④安全指導 1 防災	
今年度の重点目標	・避難訓練や防災に関する学習活動を通じて、大きな災害から、生徒自らが身を守ることができる姿勢、行動、判断力を育成する。	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1学期に1回、2学期に1回の目安で避難訓練を実施する。(内1回は火災、1回は震災を予定)</li> <li>・2年生を対象とした救急救命講習の実施。</li> <li>・不審者対策防犯訓練(職員向け)の実施。</li> <li>・防犯教室の実施。</li> </ul>	
主担当	防災担当者	
現状	・能登半島地震を経て、多くの生徒が震災に関して考える機会があったと感じる。特に、地震の怖さ身近さ、その後起こりうる災害による自分達の生活について大きく考え方が変わったのではないと思う。いつ、どこで、どのような形で起こりうるか予想できない日々の中で、常に危機意識を持たせることが必要と言える。昨年は2回の避難訓練を行い、意識の向上を図った。生徒は緊張感を持ってしっかりと臨めるようになった。	
評価の観点	(成果指標) 防災に対する意識が高まり、防災訓練等に緊張感を持って臨むことができる。	
実現状況の達成度 判断基準	防災訓練および研修を通して防災に対する意識が高まったと答えた生徒および職員が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	
判定基準	生徒、職員ともにC、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	生徒…96%(A)	教職員…80%(A)
判定結果(最終)	生徒…97%(A)	教職員…86%(A)
成果と課題 今後の改善策等	避難訓練を通して、実際に起ったときを想定しながら、取り組むことができた。今年は1月に生徒に告知なしの避難訓練を行うことで、より実践的な訓練を実施することができたので、次年度はまた違う形でやりたい。	

評価項目	④安全指導 2 交通安全	
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自転車通学生のヘルメット着用を徹底していく。</li> <li>・登下校時に街頭指導を行い、交通マナーの徹底を図る。</li> </ul>	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登下校指導や集会での呼びかけ等を通じ、交通マナーの徹底を図る。</li> <li>・交通事故が起こった場合はその事例を生徒に知らせ、通学路の危険な場所を周知させる。また、通学路のなかで危険な場所がある場合は通学路の検討、改善を行っていく。</li> </ul>	
主担当	交通安全担当者	
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度当初に、1年生の保護者に通学路の登録・自転車通学許可申請を行い、交通マナーの順守を約束させている。</li> <li>・あいさつ運動を兼ねた街頭指導や一斉下校での街頭指導を行い、交通マナーの定着を図った。</li> <li>・交通量の多い表通りに通学路を変更したことで、マナー向上、ヘルメットの着用の徹底が一層求められる。</li> <li>・99%の生徒がマナーやルールを守っていると答えているが、ノーヘルや並列走行が多々見られる。</li> </ul>	
評価の観点	(成果指標) 登下校指導を通して生徒の交通マナーに対する意識の向上が見られたか。	
実現状況の達成度 判断基準	「交通マナーを意識するようになった」と答えた生徒が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	99%(A)	
判定結果(最終)	98%(A)	
成果と課題 今後の改善策等	10月に大聖寺警察と連携して交通安全教室を実施し、ヘルメットの着用や並列走行などの交通ルールを守ろうとする意識を上げるための取り組みを行った。しかし、中間結果より下回った判定結果となっているため、まだまだ意識づけが弱いと感じる。今年度は警察の方が朝路上に立ち、交通指導を行っていた。そのときに一旦停止などの違反で止められた生徒も多くいた。今後は、ヘルメット着用や並列走行などの交通ルールに加えて、校区内で一旦停止が必要な場所の確認などを行っていく必要がある。そのためにまずは教員で共通理解をすることが必要である。	

評価項目	⑤保健管理 1健康・成長	
今年度の重点目標	心身の健康について関心を持ち、生涯を通じて主体的に健康的な生活を送ることができる生徒を育成する。	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自らの生活習慣を振り返り改善できるよう、1・2学期に1回ずつセルフチェックを実施する。</li> <li>・セルフチェックの結果を集計し、生徒の個別指導や学期末保護者面談の際の資料とする。</li> <li>・全体的な傾向をつかみ、実態改善に即した学級での保健指導や学校保健委員会の話題決定等の参考にする。</li> </ul>	
主担当	保健主事	
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・望ましいとされる12項目の生活習慣について、1学期と2学期の年2回調査をした結果、2学期は改善が見られた。しかし、セルフチェックの結果では、7時間未満の睡眠の生徒が、1年生は8.4%、2年生は19.7%、3年生は29.5%いるなど、学年が進むにつれ睡眠時間が足りていない現状があることがわかった。規則正しい生活を阻む要因になっていると考えられる電子メディア機器の長時間使用による健康被害などについて、引き続き学校全体で取り組んでいきたい。</li> </ul>	
評価の観点	(成果指標) 保健指導を通して、健康な生活習慣の確立に向けて、生徒及び職員の意識が高まったか。	
実現状況の達成度 判断基準	規則正しい生活を送るよう心がけたと答えた生徒および習慣改善へ向けての指導を実施したと答えた教職員が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	
判定基準	生徒、職員ともにC、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒および教職員調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	生徒…83% (A)	教職員…75% (B)
判定結果(最終)	生徒…89% (A)	教職員…81% (A)
成果と課題 今後の改善策等	<p>規則正しい生活を送るよう心がけたと答えた生徒および習慣改善へ向けての指導を実施したと答えた教職員が、中間結果よりも高い数値となった。しかし、セルフチェックの結果を1学期と2学期で比較した結果、2学期は、午前0時以降に寝ている生徒および睡眠時間が7時間未満の生徒が増加していた。午前0時以降に寝ている生徒は学年が進むにつれ増加しており、それに伴い睡眠時間も短くなっていた。朝食の摂取状況についても、1学期に比べ2学期は、毎日食べた生徒の割合が減少していた。今後も、生活習慣の改善が必要な生徒への個別指導を行うとともに、学期末保護者面談の機会を利用し、保護者に現状をお知らせし協力を仰いでいく必要がある。また、各クラスでも望ましい生活習慣についての保健指導を引き続き行っていく必要がある。</p>	

評価項目	⑤保健管理 2食・健康	
今年度の重点目標	・計画的に食に関する指導を行うとともに、給食時間における指導の充実を図る。	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食に関する指導については、栄養教諭が中心となり、生徒の実態を把握した上で、各学年に応じた指導を継続していく。</li> <li>・給食委員会の活動を通して、生徒同士で食の大切さや感謝の気持ちを伝えあう機会を増やす。</li> <li>・給食時間の指導について、(準備や配膳、片づけを含む)年度初めに教職員で共通理解を行い、また月ごと、学期ごとにも反省を踏まえ再確認を行う。</li> </ul>	
主担当	栄養教諭	
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・80%以上の生徒が苦手なもので少しは食べるようにしていると答えており、多くの生徒が食を大切に考えていると思われるが、給食時間の様子を見ると、苦手なものは口にしない生徒も、少数ではあるが存在するので、継続的な指導が必要である。</li> <li>・教職員の生徒への積極的な働きかけがされているが、学級によって準備時間や残食量などに差が見られるので、今後も教職員間の共通理解が必要である。</li> <li>・行事食やコラボ給食などの取組により、生徒の食への興味関心を増やすことができた。</li> </ul>	
評価の観点	(成果指標) 生徒は苦手なもので少しは食べるように努力できたか。	
実現状況の達成度 判断基準	苦手なもので少しは食べるように努力できたと答えた生徒、及び働きかけができたと答えた教職員が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	
判定基準	生徒、職員ともにC、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒および教職員調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	生徒…86% (A)	教職員…70% (B)
判定結果(最終)	生徒…85% (A)	教職員…71% (B)
成果と課題 今後の改善策等	<p>残食ゼロの取組については、行事予定に追加する等して学校全体で取り組み、残食率の低下に繋げることができた。生徒の食品ロスへの関心の高さは伺えるが、自らが苦手なものを食べるように努力することとは別と捉えた生徒もいたのではないかと考えられる。給食を残さず食べるためには、食に関する指導については継続的にを行い、食に関心を持たせる機会を確保していく必要がある。次年度は苦手なもので少しは食べることにとらわれず、他の面からも給食を残さず食べるための取組を行いたい。</p>	

評価項目	⑥特別支援教育・教育相談
今年度の重点目標	・支援を要する生徒の情報を学校全体で共有し、職員の誰もが適切な支援をできるよう工夫する。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気づき票やQU(楽しい学校生活を送るためのアンケート)などの分析により、支援を要する生徒を早期に発見する。</li> <li>・支援シート・ファイルを充実させる。</li> <li>・情報交換を密にすると共に、対象生徒に対しての共通理解を図る。</li> <li>・特別支援教育委員会を開催し、担任を中心とした教職員全体での具体的な支援方法を共有・実行する。</li> <li>・SC(スクリーンリーダー)、SSR担当、通級指導教室担当、教育支援員との連携を深めて、生徒理解に努めていく。</li> </ul>
主担当	特別支援教育コーディネーター・教育相談担当
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校・別室登校の生徒数は昨年度から大きな変化はない。別室登校については、教職員全体で対応するシステムも円滑に機能している。今年度はSSRの設置により、生徒の個々の状態に合わせた対応ができると思われる。</li> <li>・支援を要する生徒に関しては、課題や支援の方法について、全教職員の共通理解が図られており、二次障がい未然防止にもつながっている。</li> <li>・通常学級における支援を要する生徒は増加傾向にあるとともに、支援の多様化が課題になっている。</li> </ul>
評価の観点	(努力指標) 学校生活に不適応をおこしている生徒、またはおこす心配のある生徒に対して、適切な支援を行うことができたか。
実現状況の達成度 判断基準	特別な支援を必要とする生徒に対し、生徒の実態に応じた支援を行ったという教職員が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	95%(A)
判定結果(最終)	95%(A)
成果と課題 今後の改善策等	支援を必要としている生徒への継続的な支援を行い、情報共有を行うことができていた。SC・SSW・Beingなどの外部機関と連携し、支援体系を整えることができたのが要因だと考えられる。特にSCとは生徒や保護者の対応について相談・アドバイスをもらうなどの教員への助力も得られていた。通常学級に在籍している支援を要する生徒は増加・多様化しており、2学期後半には不登校生徒も増加した。通常学級に在籍している支援を要する生徒については、特別支援教育アドバイザーへの要請・相談を行い、ケース会議を経て、今後の学習や学校生活に生かすことのできる対応などを相談し、支援を継続していく。SSRの活用については、柔軟な対応が可能である反面、利用の仕方、関わる教員の対応など、さまざまなケースがあるため、今後さらに情報共有を密に行っていく必要がある。

評価項目	⑦組織運営・業務改善
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校運営企画委員会を設定したり校務分掌部会の有効な活用などで効率化を図るとともに、「報告・連絡・相談」を徹底し、課題に対して組織的に対応する。</li> <li>・業務改善の取り組みを進めるため、各教職員が各自の業務を見直し、改善を図っていく。</li> <li>・部活動の休養日を計画的に設定し、教職員の負担軽減と生徒の学習面や健康面のバランスのとれた成長につなげる。</li> </ul>
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校運営各委員会及び校務分掌部会などを計画的に開催し、組織的に業務の企画を行う。</li> <li>・またその内容は着実に各学年会等で伝達することで、共通理解・共通行動に努める。</li> <li>・最終退校時刻の目標を19時30分と設定する。</li> <li>・業務改善の意識を高めていくため、業務を見直す取り組みを全職員で考え思考し改善していく。</li> <li>・C4thの有効利用。</li> <li>・自動採点システムの導入と全教科での利用を図る。</li> <li>・部活動の休養日が適切に設定されるよう、活動計画を把握していく。</li> <li>・月2回、「定時退校日」を設定する。</li> <li>・業務の平準化を進める為、校務分掌や担当者等の見直し、また学校行事等を見直すことを通して業務改善を進めていく。</li> <li>・留守電等を有効活用していく。</li> </ul>
主担当	教頭
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年連絡会や生徒指導委員会において各学年の活動を理解し、連携協力して課題に取り組むことがある程度できているが、それぞれの会での内容を学年会で伝達し、共通理解・共通行動を確実に図る時間が取れていない。</li> <li>・校務分掌部会の設置を今年度から始めた。昨年度は担当者が一人で仕事を抱え込んでいることが多かった。</li> <li>・業務改善面では、時間外勤務時間は減少しているが、退校時間はまだまだ遅い。</li> <li>・部活動休養日は、計画通りに設定することができた。</li> <li>・C4thがうまく機能していない。</li> </ul>
評価の観点	(努力指標) 各人が働き方改革に向けて業務改善を進めていると感じるか。
実現状況の達成度 判断基準	働き方改革に向けて業務改善を進めていると感じている職員が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満
判定基準	C、Dのときは原因を分析し、改善を図る。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	70%(B)
判定結果(最終)	76%(B)
成果と課題 今後の改善策等	学校運営企画委員会や生徒指導委員会において連携協力して課題に取り組もうとしているが、それぞれの会での内容を各学年・分掌で共通理解・共通行動ができていないことがある。次年度から共通理解・共通行動を十分に推進するために校務分掌部会の振り返りを実施する。働き方改革に向けて業務改善を進めていると感じている職員が76%とある程度意識はしているが、80時間を超えている職員数が2学期以降も月6～8人と少なくはない。

評価項目	⑧研修
今年度の重点目標	教師が相互に学び合うという意識をもち、日常的、定期的に研修をおこなう。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上のためのチーム会で基本方針を決めて、組織的に校内研修を行う。</li> <li>・職員会議、学年会、教科部会、校務分掌会で、教育活動全般にわたる取り組み、課題について若手・中堅・ベテランが相互に支援・相談する中で、若手教員を育成する。</li> <li>・休憩時間や放課後等の時間における若手教員との会話を積極的にに行い、その中から見つかった課題に対しては検討会等で検討する。</li> </ul>
主担当	教頭、主幹教諭
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上のためのチーム会を定期的に行い、計画の進捗状況や今後についての意見交換を行っている。</li> <li>・定期的に学年連絡会が行われており、教育活動が組織的に行われるようになった。</li> <li>・若手教員が相談できる組織体制はできているが、計画的ではない。今後、日常的OJT他、定期的OJTを計画的に行っていく。</li> </ul>
評価の観点	(努力指標) 計画的、日常的に校内研修をおこなうことができたか。
実現状況の達成度判断基準	計画的、日常的に校内研修をおこなうことができたという職員が A: 85%以上 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満
判定基準	C、Dのときは原因を分析し、改善を図る。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	95% (A)
判定結果(最終)	95% (A)
成果と課題 今後の改善策等	今年度は学力向上のための2つのチームに全職員が所属し、チーム会を定期的に開催することで効果的に取り組みを進めることができた。次年度はそれぞれのチームで協議したことを全体で共有し、より良い取り組みになるようにしていくことが大切である。また、校内研修が先生たちにとって有意義なものになるように、日程調整や内容を精選していくことが大切で、必要なら外部講師を招いたり、視察に行つて情報共有するような研修の形など次年度は工夫していく。

評価項目	⑨保護者・地域との連携
今年度の重点目標	教育活動の状況について適宜お知らせしていくとともに、その内容を見直し、保護者や地域との連携と学校への理解がより深まるようにする。
具体的取り組み	ホームページの更新や各種便りの発行を着実にを行うとともに、内容の検討を行っていく。 また情報の把握をしっかりと行い、その対応について保護者メールでも適切に配信していく。 全市導入の配信システムホトモンを有効活用していく。
主担当	教頭
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校便り等の各種便りやコードモン、HPで学校の様子をお知らせしてきている。</li> <li>・コードモンで緊急メールを配信したり、配布物を添付して保護者へ確実にお知らせが届くようにしたり、欠席連絡等を行っている。</li> <li>・HPは毎月更新を行っており、学年毎の月行事も掲載するようになった。</li> <li>・ホームページは新しいものにリニューアルした。</li> </ul>
評価の観点	(成果指標) 学校便り・学年便り・HP・メール等で、学校の様子が明確かつ丁寧に伝わっているか。
実現状況の達成度判断基準	学校便りやHP等で、学校の様子がよくわかると回答した保護者が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満
判定基準	C、Dのときは具体的な取組を考える。
備考	保護者調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	92% (A)
判定結果(最終)	92% (A)
成果と課題 今後の改善策等	学校からの緊急メール・部活動の大会結果等については、その都度コードモンでお知らせしている。学校便りや学年・給食・保健便り等についても、紙での配付を控えコードモン及び、HP等でお知らせしている。 また、HPは毎月更新を行っており、学年毎の学級便りなども掲載するようになってきた。

評価項目	⑩教育環境設備
今年度の重点目標	学校安全点検を定期的に行い、安全な施設になるように整備、美化に努める。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全点検の計画に沿った実施と、不良箇所等への早期の対応を心がける。</li> <li>・日常においても職員が協働しながら校舎内外の見回りを行い、不良箇所の情報の把握と早期の対応及び美化に心がける。</li> <li>・生徒からの情報が生かされるよう、生徒会委員会とも連携していく。</li> <li>・縦割り清掃活動を今後とも続け、しっかりと清掃に取り組む環境、雰囲気大切に作る。</li> </ul>
主担当	教頭、管理担当者
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員アンケートから、殆どの職員が安全点検は計画通り実施し修繕、美化に努めることができています。</li> <li>・日常においても見回りの中で不良箇所等の情報の把握を行っている・協働で営繕を行う体制作りは十分といえない。</li> <li>・職員室の棚や窓際といった部分の美化、整理は十分といえない。</li> <li>・不良箇所の整備、修繕は十分とはいえないが、教育委員会等とも連携しながらできるだけ早期に取り組んでいる。</li> </ul>
評価の観点	(努力指標) 校舎内外の管理箇所の安全点検を定期的に行い、協働で修繕・美化に努めることができたか。
実現状況の達成度判断基準	校舎内外の管理箇所の安全点検を定期的に行い、協働で修繕・美化に努めることが A: できた B: おおむねできた C: あまりできなかった D: できなかった
判定基準	A、Bの合計が80%未満のときは、問題点を把握し、改善に向けて管理責任者等と対応を検討していく。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	80% (A)
判定結果(最終)	86% (A)
成果と課題 今後の改善策等	教職員アンケートから、殆どの職員が安全点検は計画通り実施し修繕、美化に努めることができていますが、日常においても見回りの中で不良箇所等の情報の把握を行っており、その都度協働で営繕を行うことができてきた。不良箇所の整備、修繕はまだ十分とはいえないが、学校だけでは整備、修繕できない箇所は教育委員会等とも連携しながらできる範囲内で取り組んでいる。

## 学校関係者評価

- ・部活動地域移行によって、先生方が土・日に休めるようになり心身の健康を保障できるようになると良いなと思っています。来年度は土・日が完全に地域クラブの活動になると聞いたが、大会引率等の面も含めて、先生方の負担が減るようにして欲しい。
- ・総合的な学習の時間で錦城中学校区（大聖寺）のことについて調べるような活動を入れてほしい。
- ・業務改善や働き方改革について、先生方の業務を分散したり分担できるようにすることも必要だと思うので、できるところから取り組みを進めて欲しい。
- ・教育長の教育改革は子どもたちの学びにどのような影響を与えているのか教えてほしい。
  - 本校では学校全体で取り組みを進めている。学びの空間を充実させて、机やイスを新しく配置したりして、子どもたちが自分で学びの場も選択できるようになっている。全国からの視察もたくさん来て、実践の成果等も協議する機会も増えている。ただ、今の実践はあくまで1つの方法なので、より良い学びのために次年度以降も学校全体で組織的に取り組んでいきます。